

近・現代地域史の難しさ

専門委員 島袋善弘

歴史を叙述するうえで、何をどう評価し、どのように記述するかということは、常に困難さをともなう。歴史上の事実は何人に等しいものであるにもかかわらず、個々の事実の取り上げ方や、評価は人によりまた時により異なるからである。

このような歴史叙述の一般的な難しさに加えて、地域の近・現代史叙述には別の困難がある。その一つは事実が現在に近いために歴史的事実が共通認識にいたるまでに熟せず、そのために記述が一貫しにくいという近・現代史叙述一般に係わる問題である（共同作業でなされる場合その傾向が強くなる）。

地域の近現代史叙述の困難さのもう一つは、現に地域で生きている人や関係者と係わることを扱うという点である。そのために、当事者に対する配慮や政治的考慮等が優先され、叙述にバイアス（偏奇）がかかることがあるということである。

さて、甲府市史の編纂過程でも取り扱いが難しい問題が生じた。

九一年七月三十一日に突如マスコミでとりあげられた（朝日新聞地方版）「三者会談」問題（市議会運営に暴力団が利用されたといわれる一九七八年の事件）がそれである。この問題には二つの論点がある。一つは政治過程の扱い方の問題であり、もう一つはマスコミ報道と歴史としての取り扱い方の関係である。

第一の問題については、政治の民主的運営という原則がある現在では、公的立場にある人の言動が、取り上げられることは避けられない（この点は政治家のプライバシーとは異質な問題である。なお

言動に責任がともなうのは政治家に限られるものではない）。

地域の近・現代史叙述の難しさは第二の点にある。事実関係の評価に共通認識らしきものがないということと（言い換えれば未だ歴史の対象になりきっていないということ）、社会的関心の集め方（マスコミの報道）によって、ことが生々しくなりすぎて、扱いに相当慎重にならざるをえなくなるという点である（報道でなされた「市の正史に掲載される」「甲府市史を代表する事件として認知される」等という刺激的なことばは、ことを歴史の世界から一気に生々しい現実の世界に引き戻す役割を果たすことになる）。

この三者会談に示されるような地方政治状況は、本来固有名詞抜きで民主的政治運営の定着過程での一つの出来事として扱われるべきことであろう。多少残念ではあるが、地域史がその時代の限界をもつことは、事実として差し当り受け入れるのもやむをえないと考えざるをえない。

近・現代地域史の在り方を含めて十年間学ぶことは多かった。記して謝意を表したい。

近・現代編を終えるについての私見

専門委員 清水 威

近現代の通史を書くにあたっては、甲府市の他の都市と異なった特殊な条件・構想・実体をもそのなかに浮き彫りにしたいと最初は考えた。

ところがこれにウエイトがかかりすぎると通史としてではなく単に独立した出来事の歴史的事実の追求分析に深入りしてしまうこと